

長野環境人士

自然に優しく、暮らしを楽しく

小林光さん対談企画

ガーデンデザイナー
ニコラス・レナハンさんと語る

ガーデンデザイナーのニコラス・レナハンさん(49)「諏訪市」が手掛ける庭には、自然を基本にしながらその土地に適した植栽で景観をつくるという哲学が生きている。母国のイギリスで景観設計やガーデンデザインを学び、そのノウハウを生かす場所を選んだのが日本だった。

きっかけは庭園デザイナーで僧侶の枅野俊明さんとガーデンデザイナーのダン・ピアソンさんとの対談。「庭をその土地の歴史とともにつくり上げていく。その庭がある土地をリスペクトする」という枅野さんの考え方に感銘を受けた。

来日して感動を覚えたのは長野の自然。山々の緑の多さ、深さ、そして季節の移り変わりの美しさがニコラスさんの感性に響

いた。一方で好きな季節は夏ではなく秋と。四季がはっきりしている日本、長野。庭をデザインするとき、秋の風景をイメージしながら空間をつくっていく。「秋の色彩、雰囲気、香りが好き」と語るニコラスさん。庭づくりは1年を見越してーと思いきや「施主さんは、ともに一生をかけて、または世代を超えて庭と一緒につくり上げていくいわばパートナーですね」と微笑む。



自然の声に耳を傾け、その土地を感じ、周囲の環境に無理なく調和する庭づくりを心掛けていくというレナハンさん

（野村知秀）
8面に対談

自然の声聞き共に息長く庭づくり

長野環境人士

自然に優しく、暮らしを楽しく

小林光さん

対談

ニコラス・レナハンさん



小林光さん 74

元環境省環境事務次官。東京大先端
科学技術研究センター研究顧問。茅
野市行政アドバイザー(環境分野)

景観設計の専攻が転機

小林 40年以上前、フランスに留学していた頃の話ですが、ベルサイユ宮殿とその近くの王妃マリー・アントワネットの別荘とでは庭の作り方が全く違っていました。壮大な景色を造り上げる仏国式と自然風景を楽しむ英国式との違いがよく分かりました。

ニコラス イタリアの形式的な庭がフランスに伝わり、集大成がベルサイユ宮殿と言われています。その一方でイギリス人は宮殿の庭に違和感を感じ、別の道を探りました。その意味で言えば、ベルサイユ宮殿が英国式庭園を生んだという見方もできるでしょう。

小林 私は英国式、つまりイングリッシュガーデンの方がしっくりくるというか、親近感を覚えます。

ニコラス イングリッシュガーデンは、中国や日本のように借景を大切にしますよね。ほかの欧米各国にないわけではないですが、借景を大事にするのはイングリッシュガーデンの特徴の一つと言えるでしょう。

小林 東洋から輸入したということなのです。

ニコラス 大航海時代にイギリス人は茶葉を求めて中国に向かい、様々なものを持ち帰りました。その中に庭づくりもありました。中国の様式をヨーロッパの庭づくりと融合させてイングリッシュガーデンができたといわれています。

小林 ニコラスさんは最初からガーデンデザイナーを目指していたのですか。

ニコラス いいえ。最初は建築士を目指していました。父が建築

士でしたので。

小林 建築士からガーデンデザイナーへと進路が変わったのはいつ頃ですか。

ニコラス 建築士を目指していた頃、私はどのような素晴らしい建築物も空間デザインが伴っていないと、魅力や価値が下がってしまうと考えていました。それでシエフィールド大学(イギリスの国立大学)に進学しましたが、そこでランドスケープ(景観設計)を専攻したのが転機となりました。

再度、マッキントッシュ建築スクールで建築学と実務を学んだ後、エディンバラ王立植物園で世界の植物に触れ、ガーデンデザインの道を歩むことになりました。

杵野俊明さんから影響

小林 日本に興味を持ったのはなぜですか。

ニコラス 庭園デザイナーで伴侶の杵野俊明さんに影響を受けました。最初はイギリスの公共放送「BBC」のある番組でした。杵野さんと北海道の十勝千年の森をデザインしたダン・ピアソンさんが対談をされていました。その中で、庭をその土地の歴史とともにつくり上げていく、庭という空間だけでなく、その庭がある土地をリスペクトするという考え方を述べられていて感銘を受けました。

小林 杵野さんからの学びは、今でもニコラスさんの中に根付いているのでしょうか。

ニコラス 私の庭づくりの基本は、その土地を感じ、その土地に聞くことです。依頼を受けてまず行うことは、1週間ほど施主さんの庭とその周囲に何があり、遠方



ニコラス・レナハンさん 49

ガーデンデザイナー
NICO 取締役 Bsc.(Dual Hons) Bachelor of Science Landscape Design & Plant Science

土地をリスペクトする考えに感銘



自身が手掛けた庭のデザインの意図を語るニコラスさんと小林さん=4月8日、ライフクリニック蓼科(茅野市豊平)

に何が見えるのかを徹底的にリサーチすることです。周囲の環境を把握し、無理なく調和する庭をつくることを心掛けています。

小林 伝統的なイングリッシュガーデンとニコラスさんの庭づくりとの違いは何ですか。

ニコラス 英国式の庭は中央部に芝生を植え、その周りに植栽をするのが一般的です。しかし、私は中央部も含めて植栽にします。芝生は使うこともありますが、メインではありません。その土地ならではの自然を意識し、その土地の自然に無理なく入り込んでいくようなイメージを大切にしています。

長野の美しい山に感動

小林 来日した時の最初の印象を覚えていますか。

ニコラス 私は2001年に来日しました。最初の訪問先は東京でした。東京は庭が少ないのであまり魅力的ではなかったです。その次は長野でした。このときはびっくりしましたね。山々の美しさ

に感動しました。

小林 ほかに。

ニコラス 当時は日本の気候について深く知らなかったのですが、その点も勉強になりました。イギリスと日本の気候は、春、秋、冬は似ていると思います。ただ、日本の夏は暑いですね。それでも長野の夏は感じのいい暑さです。緑の多さ、深さにも感動しましたね。季節の移り変わりも美しいです。そんな日本の四季を学びたくて、1年間滞在するつもりで再び来日しました。イギリスに住んでいたころ、日本の印象といえば、東京、大阪、京都で、それ以外の日本の田舎についてはあまり知りませんでした。長野に来て日本の自然を深く知ることができました。

小林 当初1年と考えていた日本での滞在が結局定住することになったのですが、なぜですか。

ニコラス 日本のイングリッシュガーデンで働いていた時に共通の知人を通じて妻と出会いました。来日後、たくさん経験と気持ち

施主さんはパートナー

小林 最後にニコラスさんが感じる日本の公共の庭づくりに対する注文や提言についてお聞きしたいです。

ニコラス 庭をつくる際に景観が後回しにされているなど感じることはありますね。公共の空間をつくる仕事をさせていただくこともありですが、最初の提案に対

し、アスファルトやコンクリートを使うよう求められることが多々あります。私はもっと自然の美を生かした景観設計をした方がいいと思っています。また、庭づくりは最初から完璧を求めるのではなく、むしろ最初はシンプルに。そして、自然と一緒に、自然の声を聞きながら、いろいろと試して何年もかけてつくり上げていくという感覚でいいと思います。

土地の自然に無理なく入り込むデザイン



県内や関東を中心に活動するニコラスさんがこれまでにデザインした庭の一つ(群馬県桐生市、セレニティーガーデン/NICO提供)

を与えてくれた当時の勤務先には本当に感謝しています。その上で自然を基本にしながら、その土地に適する植栽で景観をつくるという私なりの庭づくりの哲学を追求するため、07年に独立しました。

リラックスの秋が好き

小林 庭の雰囲気はイングリッシュガーデンでも使う植物はその地域の植物で表現することです。今回の対談の場所を提供していただいた蓼科ライフクリニック(茅野市豊平)にもそうした哲学が反映されているのでしょうか。

ニコラス この場所は「明るく場所にする」というよりも「患者さんが落ち着く雰囲気」をどうにしているのか」ということに心を砕きましたね。

小林 このクリニックの建物と植物の調和をどのように考えたのですか。

ニコラス クリニックの正面から見える八ヶ岳連峰は本当に素晴らしいと思います。だから、八ヶ岳と建物を上手につなげる。そんなイメージを持ち、デザインしました。

小林 春(対談当時)はいいですね。いろいろな花が咲きます。

ニコラス はい。でも私は四季の中では春よりもむしろ秋が好きです。デザインする際にも考えるのはその場所の秋の風景ですね。

小林 秋が好きな理由はなんですか。

ニコラス 春は早い、夏は忙しい、一方で秋はリラックスだと思ふのです。だから秋が好きです。それに色がいい。秋の色彩は1年の中で一番美しいです。秋の雰囲気や香りも好きです。

小林 庭づくりとは時間を掛けてでき上っていくものなのではないのです。それは公共も企業や民間団体も個人宅でも変わりません。ガーデンデザイナーと施主さんは一緒に一生かけて、または世代を超えて庭をつくり上げていくパートナーだと思うのです。